

村落における歴史認識と語りのかたち

波平, 恵美子
九州芸工大

<https://doi.org/10.15017/2235378>

出版情報 : 九州人類学会報. 16, pp.1-3, 1988-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

村落における歴史認識と語りのかたち

波平 恵美子

人びとが、自分達のムラの歴史を語る場合、多くは自分の家との関わりにおいてである。自分の家の村落内の位置づけや格づけを、ムラの成立において、自分の家の先祖が果たした役割によって説明したり正当化しようとする。そして、より古い時代にこのムラに定住した先祖を持つ家ほど、そのムラの中での格付けは高くなる。「草分け」と呼ばれる家はほとんどの場合そのムラの中で最高の格付けがされている。村落単位ごとに語られる歴史とは、周辺の村落に対してはその地方でのその村落の成立の新旧や他村落との成立の過程での関係についてであり、村落内部では、各同族団や家の、成立時に果たした役割や、村落へ移住してきた順位である。そして、古ければ古いほど格が高く、新しければ新しいほど格付けが低いのが一般的である。

昭和55年以来私が調査している新潟県東蒲原郡上川村室谷において語られるのは、現在では専ら村落の東半分が消失したいきさつについてである。1800年代の初め頃、会津藩が『新編会津風土記』を編纂した時には、この村には、ムラ成立を果たした兄弟2人の話が伝わっていた。しかし、現在これを知る人はいない。そして専ら語られているのは、川をはさんで東と西に同規模に発達していた集落の、東側のみが消失したことと、そのいきさつについてである。村落の成立、その盛衰のいきさつが語られなくなり、片側消失の伝説のみが語られるようになった理由は興味深いものがあると思われるが、それについては今のところ明らかにすることができない。

〔室谷百かまどのお話〕

現在室谷には32戸あり、それらはすべて川の西岸にあり、家の正面は川に向いている。その内の3戸は、昭和38年の豪雪による地崩れで家が崩壊するまで東岸の橋の横に立っていた。3戸は同一同族団の本家と分家の関係にあり、橋の西岸側、つまりこの3戸の家と川をはさんで向い合う形でこの同族団の他の3戸の分家が建っている。本家に伝わる話では、この同族団は東側集落のほぼ中央に位置していたが、集落背後の山崩れのために、何度か移転を余儀なくされ、昭和38年の山崩れで、ついに東側に住むことを諦めて西側の、集落のはずれの高台の現住所に移ることになったのだという。

「室谷百かまど」と呼ばれる伝説は、現在この村落内だけではなく、室谷川沿いの各ムラムラや、室谷から20キロメートルほど離れた津川町の人々にもよく知られている。なお室谷という村落は、他地域の人々からは「山の最奥のムラで少しばかり変わった生活をしている。辺鄙な所ではあるが、周辺のムラよりはるかに豊かである」と考えられている。伝説は次のようなものである。

「かつて室谷には西側に50戸、東側に50戸の合計『百かまど』のムラであった。ところが天明の飢饉でムラの人々がほとんど死に絶えて現在のように小さなムラになった。その折に人々は20戸以上家数を増やしてはならないという定めを作ったが、明治になるまで室谷の人々はこの掟を守り続け、明治期以降少しずつ戸数が増えて現在に至った。」

この話では、必ずしも消失したのが「東側」の集落であるとは言っていない。ムラの規模が小さく

なったということと、戸数が20戸に制限されたことが語られているにすぎない。また、戸数が減少した原因は飢饉であるという。ところが次の話は、集落規模が小さくなった理由が、飢饉ではなく「山崩れ」ないし「大沼の決壊」あるいは「大沼の主の祟り」によって、東側集落が消失したことによるものである。

〔大沼の抜ける話〕

東側の、かつて50戸の集落があったという地点より50メートルほど上方に「大沼」と呼ばれる池がある。これは地質学を研究している人の話によれば、地崩れによる大きなくぼみができ、それに雪融け水が溜ったのだらうということである。周囲300メートルほどの池であるが、ムラの人々の話では年々小さくなるということで、50年ほど前は今よりずっと大きかったという。「大沼抜け」の話はヴァリエーションがあり、単純なものから並べると次の通りである。

〔Version 1〕

「昔ある時、西側の集落の上方にある田で働いていた人がふと対岸を見ると、大沼が抜けて（決壊して）いる。そこで大声で反対側の人々に『大沼が抜けているぞ。急いでジャグイを打て』と叫んだ。東側の人はジャグイを打った。そのため、東側の集落は消失してしまった。」

この話は辻妻が合わない。大沼が下方へ決壊したために東側が消失したのではなく、決壊を止めるためのジャグイを打ったので集落が消失したというのである。ところでジャグイとは5寸5分の刀のことであるという。

〔Version 2〕

「昔、東側の集落を治める肝煎（庄屋）にスルガカモノスケという人がいた。その男のもとに、3日3晩大変美しい女が現われて『水屋（台所）の三本柱であるミジャバシラを自分にくれ』という。あまり頼まれてうるさいので、とうとう負けてその柱を女にくれてやった。ところがその女は大沼の主であった。大沼の主は蛇とも竜とも言われている。ミジャバシラを貰ったので、大沼の主は下方へ抜けてきた。その時三味や太鼓のお囃子の音と共に抜けてきた。それを見付けた西側集落の肝煎が『カモノスケ、何をしている。大沼が抜けているではないか。急いでジャグイを打て』と叫んだ。カモノスケはそう言われて仕方なくジャグイを打ったので大沼が抜けるのは止んだ。しかし大沼の主との約束を破ったので、東側集落は消失してしまった。」

この話でもジャグイは5寸5分の刀だという。ミジャバシラとジャグイとの関係や、なぜ大沼の主がミジャバシラを欲しがったかについては述べられていない。

〔Version 3〕

「昔東側と西側のそれぞれに肝煎がいた。東側はスルガカモノスケといい、野心家であった。西側はセイノタエモンといい、江戸末期までこのムラの肝煎をつとめた清野家の先祖である。スルガカモノスケのところへ、大沼の主が現われて、『私は下方へ抜けてゆきたいと思う。しかしミジャバシラが邪魔になって抜けれない。そこで、お前がミジャバシラをくれたら、私はお前に末代までの長者の暮らしをさせてやろう』と言った。カモノスケはミジャバシラを大沼の主に与えた。そして大沼の主は三味や太鼓のお囃子と共に抜けてきた。タエモンはその時西側の上の田で働いていた。それを見つけて『カモノスケ、何をしている。大沼が抜けてくるではないか。ジャグイを打て』と叫んだ。カ

モノスケは仕方なくジャグイを打った。大沼はそこで抜けるのが止ったが、その祟りただで東側村落は消失してしまった。」

〔Version 4〕

「昔、東側の山の中に沼があり、その主がある時西側の肝煎の所に美しい姿になってあらわれ、『私は大沼の主の支配から逃れて西側に移りたいと思う』と告げた。そして東側から西側へ抜けてこよとしたところ、東側の肝煎がそれを見つけ、ジャグイを打って止めてしまった。そのためその沼は西側へ移ることができなくなり、その祟りただで、東側の集落は消失してしまった。」

これらの伝説のバージョンのうち、3が最も整っているように見え、1が最も欠落が多いように見える。しかし、それらを伝える家が下記のことを考慮すると、それは必ずしも伝説としての「完全度が高いか」否かの問題ではないと考えられる。

Version 1：駿河同族団の本家（一部ではスルガカモノスケの先祖だという）

Version 2：清野同族団の中で一番古い分家

Version 3：清野同族団の本家がかつての肝煎

Version 4：清野同族団のライヴァルである讃岐同族団の本家

このムラの人々は、それぞれのバージョンの存在を知ってはいるが、自分の家に伝わっている話しかしない。異なる話についてたずねると「あの家ではそのように話すらしい」という。冒頭で述べたように、それぞれの同族団は自分のムラの中での位置づけに応じた伝説を保持し伝承しているようである。

いずれの話においても共通しているのは、東側の沼の存在と、東西の集落の対立である。そして、東側集落の消失は、細かいきさつの違いは別として、東西の対立の結果なのであるということが述べられている。「室谷百かまどの話」と言われる、飢饉によって家数が減少したという伝説と、大沼がからんだ東側集落消失の伝説との関係についてはよくわからない。

この研究会で私は前回これらの伝説の中から人々の自然環境の認識がどのようになされているかを分析した。今回は、歴史認識と伝説との関係について述べてみた。